

# 情報技術の匠

PROFESSIONAL

第53回

ファシリティーの匠たくみ

## 父との約束、わたしの生き方

人生はどう転がっていくか分からない。それを不安に思うのか、楽しめるのか？ 前田は、後者の人間だ。運命を恨んでも、後悔しても始まらない。今、自分にとってやるべきことをする。それでいい。



「絵を描いたり本を読んだりするのが好きな子どもでした」

という前田が今の道を志すことになったきっかけ。それは高校2年生の時に突然訪れた。

「親父の遺言です。がんで亡くなる直前でした」

前田の父は大手ゼネコンで現場監督などを担当。子どものころ、父

の職場であり、成果でもある発電所やダムなどを見て歩いた記憶は、今でも鮮やかによみがえってくる。

その父が長い入院生活に入った。そしてわずかな余命。

「夜中、おふくろと看病していたときに急におやじが起き出して、『啓介、おまえ土建屋になれ』と。それで死ぬ間際に約束しちゃった」

父が望んだ夢、自分の好きなこと。その間にあったのが「建築」だった。

「おやじのいとこが原宿で建築事務所をやっている、子どものころに自宅に連れて行ってもらったことがありました。スキップ・フロアで部屋が構成され、暖炉の前にはコルビジェの長いす。違う部屋には、真っ赤な

カウンター・キッチン。当時のわたしにはとても衝撃的でした」

大学、大学院では建築史に傾倒した。モダニズム建築のルーツとされるバウハウス、近代建築の礎を作った巨匠のワルター・グロピウスやミース・ファン・デル・ローエ…修士論文はドイツ表現派であった。

「建築の根源を探りたかった。図面を描く練習や建築計画学の勉強よりも大事にしたかったんです。原理原則を知った上で世の中に展開したい、そんな思いがありました」

新人として入社したのは、建築家が率いる「アトリエ事務所」。先生といわれるデザイナーと先輩と前田の3人。昼も夜も休日もない毎日。やりがいはある、実力は付けた。

次は、東京ビッグサイト、群馬県庁、鹿児島県庁などを手掛けた300人規模の大手設計事務所だった。

「何万㎡という大規模公共施設から、教会やレストランなど、幅広く担当しました。その時に感じたこと。

それは、企業が成長し、業務をしていくときには、まさか事務所もなしで傘を差しながらやるわけにはいかない。何か施設があって、そこで働く人が最高のパフォーマンスを発揮できて、そこで初めて本当の企業活動ができる。この当たり前のこと、建築物を造る側からちゃんとした提案



### 前田 啓介（まえだ けいすけ）

日本アイ・ビー・エム株式会社  
GTS ITS デリバリー  
グリーンファシリティーサービス  
グリーン・DC・サービス部長  
ICP コンサルティング

#### 【プロフィール】

建築デザインの設計事務所で建築意匠担当として美術館・博物館、教会、リゾートホテル、各種文化施設など数多く手掛け、1997年に日本IBMに入社。以後、建築デザインとI/T技術の融合を目指して、インテリジェント・ビル、データセンター、金融機関新規チャネル店舗開発、移動型ATMなどに携わる。1999～2001年、慶應義塾大学大学院SFC研究所訪問研究員としてI/T技術と建築の関係性の研究など社内外での活動を行っている。工学修士、一級建築士。

ができていない、ということなんです」

前田は建築家として提案すべき考え方を「ユーザー・オリエンテッド」という言葉で表す。いわゆる「大きい仕事」はできる。だが現実として設計事務所に依頼される仕事ではなかなか自分の思いは表現できない。

「建築デザインというと丸とか三角とかの『形』や、黄色とか赤の『色彩』だとかに目が行ってしまう…、それも大事なことではありますけれど。モノを作っていく理由、『何に対してお金と時間をかけるのか?』というところに疑問が強くなってきたんです」

人生、どう転ぶか分からない。

そして1997年、前田が選んだのは、まったく接点がなかった、彼の言葉を借りれば「コンピューターの会社」である日本IBMだった。

「そのころ盛んにインテリジェント・ビルディングという構想があって、ITが実装された施設にIBMが本格的に取り組みたい、ということで声が掛かりました。当時、日本IBMの従業員は約3万人。3人、300人、3万人と100倍ずつ働く場所の規模が大きくなりました（笑）」

実はIBMが提供しているのはITツールだけではない。日本IBMでは、1950年代からファシリティ・マネジメント戦略を推進し、データセンターやオフィスなど、施設の企画・構築・運営を総合的にサポートしている。そのチームをリードしているのが前田である。

規模も会社の形態も変わり、前田がやりたかったこと、つまり、ユーザー・オリエンテッドな施設造りは、夢ではなく、現実的な仕事となった。自分が設計、提案した施設の中で、人

が、情報が、生き生きと動く。

「その企業にとって『施設』を造るという行為は、ものすごい投資です。だから、その投資に対して、わたしたちはいかにして、その企業の理念や戦略に応えた価値、すなわち人、物、金、情報、施設のような経営資源の最適化を『施設』造りの観点からお届けする価値をご提供できるか。これまでにないチャレンジングな仕事です」

前田の仕事は、アウトサイドインではなくインサイドアウトの発想が必要。またそのバランス、それがここでは実践できる。

「例えばどんな家族構成で、何年後にはどういう住まい方をされて…といったライフスタイルそのものをどう考えるか。ワークスタイルも同じ。経済環境に対応するために常に変革し続けるワークスタイルを定量的に分析しなければいけません」

そのために、どのようなオフィスを造るか、施設を構築するかのロードマップ戦略を練る。上流工程から入り、パートナーになる。一級建築士としてのスキルとプライド、そしてIBMの考えるファシリティ・サービスのマネージャーとしての発想とチーム力。

今の自分の姿は、若いころ自分が想像していた姿なのだろうか？

「だいぶ違いますねえ…（熟考）、はい、違うと思います」

前田啓介という名を売る、前田啓介という名で任される。それが求めていた姿だったのだろう。だが、違うのは当たり前だとも思う。

「建築修業を始めた25年前と比べて、テクノロジーの進化があり、さまざまな要素が複雑に絡み合う世界

になった。個人ができることには限界があります。組織で、グローバルで取り組むことが、お客様のためのなる。わたしはそう思っています」



この仕事をしていてうれしいこと。

「鉄筋工の茶髪の女の子や、ニッカーボッカーをはいたおじさんたちが頑張っている。一緒にやったメンバーとお客様からお褒めの言葉をいただけること。これが一番うれしいですね」

この言葉は、自分に対してだけではない。部門でもIBMだけでもない。かかわった施工関係者、すべてに贈られるべきものだとも前田は思う。

前田が手掛けたある企業のビル。そのエントランス・ホールには「実際に汗をかけた人たちの名前」が刻まれている。前田の働き掛けにお客様が応えてくれたのだった。

「IBMが提唱しているSmarter Planet。それを支えるテクノロジーの1つがグリーンに関する技術です。今まで話してきた働く環境もそうですし、そのオフィスの何十倍と電気を使うデータセンターのアセスメントに基づく『グリーン』化は最も重要なサービスです。お客様からお金をちょうだいして、なおかつわたしたちの子どもが活躍する次世代に対しても貢献できるなんて、こんなやりがいのある仕事はないと思います」

絵を描くことと本を読むことが大好きだった男の子は、いつの間にか現場の空気の中にいることの喜びを、当たり前のように感じている。

もしかしたら、父との約束、それはもともとの天命だったのかもしれない。